

審査委員による講評

【総評】

人類史上未曾有とも言われるパンデミック下において開催された今展に、16人の作家の作品16点が各大学の推薦により出展され、伝統的な藍染や型染、シルクスクリーン、さらには脱色や着彩と洗浄を反復する「反染色」的行為に至るまで、多彩にして充実した内容の力作が集まったことは、誠に頼もしく感じられた。

自らの出自を含めアジアの風土に育まれた民俗文化としての染色の技と美に取材し、新たな表現の在り方をダイナミックに打ち出した最優秀作品「ものころへの」は、長い歴史によって培われてきた手仕事の伝統的技術への信頼と自己の身体感覚への回帰、さらに自己と他者を隔てる距離や障壁をしなやかに超えて繋り合おうとする寛容な志向が看取され、高い評価を獲得した。

ウィルスという目に見えない脅威がもたらす悲観的世界観に覆われつつある現代の状況を、一人一人の若い作家が等身大で冷静に考察し、人類史のスケールで染という堅牢な表現ツールをしっかりと見直し、使いこなしている確かな手応えが感じ取れる。

(不動美里／姫路市立美術館副館長)

【最優秀賞】 金沢美術工芸大学 山中彩

「ものころへの」

日本の風呂敷や韓国のポジャギに見られる包む文化、さらに台湾や南太平洋における樹皮布の文化の双方に触発されて制作された。また故郷宇治の山の風景、そして作者が現在暮らしている台湾など、異なる文化圏での生活体験や山中家の家紋も作品の源泉となって融合している。手前のシルクオーガンジーが、背後に吊られた鍍染作品の質感と造形の強さを軽やかに緩和させ、独自の展示空間を形成している。

(島敦彦／国立国際美術館館長)

【優秀賞】 武蔵野美術大学 向井詩織

「ソラ・カンタ・カレサンスイ」

作者はインドで、代表的なテキスタイル(カンタ)と出会う。それがきっかけとなり、インドの伝統的な染色のブロックプリント技法を学び、東京の芸術大学を経て京都に移住。枯山水を体験し、かつてイスラム文様を見た体験と重なり、異文化表現による新しい「カレサンスイ」を生みだしている。三枚の布構成により、手押しされた永遠と続く連続文様は、カレサンスイの空間を立体的、異質表現として、すがすがしい感覚を導き出している。

(辻喜代治／フリーランスキュレーター)

【奨励賞】 大阪成蹊大学 岡本涼香

「クーガー」

クーガー(英名ピューマ)は絶滅危惧種の動物である。作品はこの動物と対峙した時の感情が、創作の起点となっている。技術的には既成の布を使い、独自の脱色技術を使いながら表現している、動物の造形から宇宙的な広がりをも連想させる。染本来の染料を重ねる(プラス)表現と比べると、この色素を除去する表現技術は(マイナス)表現とも言える。そのことが「絶滅危惧種」というキーワードを、逆に浮かび上がらせるコンセプトともなっている。

(辻喜代治／フリーランスキュレーター)

【奨励賞】 岡山県立大学 大島真美

「たわむれ」

日本の染の伝統技術と美意識を現代に生かし、新たなかたちを創造するという大きなテーマを設定し、技法として繊細な立体感を特長とする「絞り染」、表現媒体としてシンプルにして多機能、和を象徴するアイテムである「風呂敷」、モチーフとして可憐な「金魚」を選び、緻密な検討の上に洗練された解答を作品として提示している。実用性を十全に備えつつ、一枚の布が孕む可能性を表現するアートワークとしても自立し得る強度を有する。

(不動美里／姫路市立美術館副館長)

【奨励賞】 東京藝術大学 大小田万侑子

「光に降りる、広がる中枢」

広幅布3枚の大きな布を素材として、ほとんど黒に近い濃い藍染に、型染で図柄を白く染め抜く。その主体は大地に根を大きく広げる樹木で、太古の感覚を宿す原初的な形状の集合で表現する。動物や水紋、また地中に埋もれた様々な事物を精細に散りばめた図柄からは、長い時間軸の中でとらえた独自の自然観と土俗的な精神性が感じられる。色のきっぱりとした対比は見る者に強い印象を与え、大胆さと緻密さが併存する模様構成は型染技術の高さを窺わせる。小さくまとめがちな風潮の中で、大きなスケールの表現に挑む意欲は評価でき、エネルギーが漲る作品となっている。

(佐藤能史／染織と生活社編集長)